慈眼寺たより

第21号
平成28年12月
春日井市下市場町
「慈眼寺」
電話　81‐6801
編集　伊藤秀文

★倭は国の真秀ろば☆

伊藤富男

「倭は　国の真秀ろば　たたなづく青垣山籠れる　倭し麗し」

この和歌は、古事記にある倭建命がふるさと大和の国（今の奈良）を思って詠んだ歌といわれている。私は、奈良旅が好きである。

私事ですが、今年の春三十八年間の教員生活を無事終えることができました。ここまでこられたのは、ひとえに支えていただいた多くの皆様方のおかげであることを思うとただただ感謝です。退職後は、悠々自適に過ごし、好きな奈良旅を思う存分満喫することができるなどと簡単に考えていたところだったが、そんな甘いものでもなく、待ち構えていたのは無収入、生活費の足しに週に三日ほど働くことにしました。また、区の仕事も引き受けたので、どうやら奈良旅三昧はお預けで、今までと変わらない何か気ぜわしい毎日が続いています。

さて、奈良そのものの魅力は一体何でしょう。よく奈良と京都を比べてどちらが好きですか？という問いかけを聞くことがあります。私は奈良と即座に答えますが、一般的に「奈良の野生」「京都の人工」とよくいわれます。奈良は、今もあまり観光化されていないので、倭建命が「倭麗し」と詠んだ自然の美しさと、「青垣山籠れる」揺籠のように、人を包み込むふるさとの原風景が残っています。ですから、歴史が動いた舞台背景そのままで、今にも生々しい足音が聞こえてきそうな雰囲気が感じられるからではないかと思います。偉そうなことを言いましたが、実際にはさほど見識があるわけでもなく、ただ単にこの仏像は素晴らしいとかこの建物は立派だ、程度のいわゆる普通の観光客の一人にすぎません。

ただ私は、一つだけこんなこだわりを持ちながら鑑賞しています。たとえば法隆寺を例にとります。法隆寺は推古十五年（六〇七年）、用明天皇のご遺願をもとに、聖徳太子・推古天皇が斑鳩の地に建立し・・・という一般的な知識は大切な要素で、その時代の臨場感を想起する意味でも必要です。しかし、その法隆寺そのものを建てたのは、聖徳太子でも推古天皇でもありません。それを今の世に残るように作り上げた人々は、その時代の大工であり職人の一人一人です。そこには、図面を引く人、山から木材を切り出す人、また壁土をこねたりする人など、多くの名もない人々がたくましく働いていたはずです。ですから、私は建物を観賞するときには、いつも当時の情景を目の前に思い描きながら、昔の名もなき人々に畏敬の念を払うとともに感謝の気持ちを込めます。そして、今もそこに誇らしげに建っている建物の素晴らしさに、あらためて感動を感じるようにしています。

最後の宮大工と称された西岡常一氏は、白鳳・天平時代の宮大工が、どのように千三百年以上も風雪に耐える建物を作り上げたのかを研究し、「木は生成りに組む」とお話されています。「癖（くせ）のない素直な木は弱い。力も弱く耐用年数も短い。逆に、癖の強い木ほど厳しい環境で育っただけに命も強い。例えば、西からの強風にさらされた山の斜面で育った木は東にねじれる。元に戻ろうという強い生命力が働き、それが癖となる。左にねじれを戻そうとする木と、右にねじれを戻そうとする木を組み合わせると、癖と癖ががっ

〈青柳歌壇・俳壇〉

●青柳山日本目高のおでむかえ●
色鳥の声に凭れよ染五郎
伊藤清雄

●秋日差母亡き部屋の古箪笥
●庭土の固きを割って芽水仙
伊藤貴美子

●長き夜の父の胡桃を鳴らし見る
●本家より届く蜂の子飯秋収め
矢野孝子

●ふくろうのブローチ胸に街に出て初冬の風の中に身を置く
た

●伊吹山よくぞ登った麓から八十三歳小さな快挙
●育ちよし大根人参ブロッコリ蜜柑もたわわ秋は本番
今井正

ちり噛み合って、建物全体の歪みを防ぐとともに、時間が経つにつれてより縮まって強固になる」のだそうです。昔の人々がその事実をちゃんと踏まえて強固な法隆寺の建物を作り上げたと考えると、不思議な感動を覚えます。さて、今の時代の建物が果たして千三百年以上そこにあり続けることができるのでしょうか。

旅人はそれぞれの見方で鑑賞します。それはとても尊いことです。個人の見方を押し付けたりとやかく言ったりすべきではありません。それぞれの思いを持って鑑賞するからこそ、そこに惹かれる人があり、日本の風土や遺産がいつまでも見守られていくことを強く信じています。

まだまだ奈良の魅力は奥が深く、汲めども尽きません。私の奈良旅は、奈良が「国の真秀ろば」で有り続ける限りこれからもずっと続いて行くことでしょう。さて、余白残り少なく、このあたりでペンを置くことにします。ありがとうございました。

（当年度下市場区長）

つわぶき

☆米寿をめざして★

今井正

この秋、八十四歳になった。八年前、家事一切を取り仕切っていた妻に先立たれた。手探りで片肺飛行を続けているが、どこまで飛距離を伸ばせるかは知る由もない。妻は金婚式直前に不帰の人となった。今わの際、妻の手を握ると、振り絞るような微かな声で「お父さんは長生きして」と口にした。妻の最後の一言は言霊として私の心に生き続けている。ふとした折に「死に様」のことが頭に浮かぶ。心はいつも言い得て妙のギャグ、ピンピンコロリを所望している。寿命が尽きるその直前まで比較的元気で居られた老人は楽に逝くと言われている。この一つの死生観に至近するに常日頃の「老活」が絶対に欠かせない。自分が実践している「老活」は、口動、行動、考動の三つである。

口動・・・週に一～二回カラオケ喫茶で腹の底から発声、五曲ほど歌っている。またいろいろの場で出来るだけ多くの人と会話するように心がけている。

行動・・・市から委嘱され七年前から「子供応援団」の一員として毎朝、危険な交差点に立ち、通学生の安全を見守っている。

考動・・・辞書を引いてもこの言葉は見当たらない。月に一回、自分史の会で読む、書く、それに話すことの勉強をしている。下手な短歌を週に二句詠み記録している。これまでに朝日新聞の「声」に投稿し七十三回掲載された。最近、不発だが老骨に鞭を当て再起したいと思っている。

子供の頃に「よく学びよく遊べ」のフレーズを耳に胼胝ができる程聞かされた。人生の最終章にある自分にもこのスタンスが必要と思う。老人でなく朗人で、後期高齢者でなく光輝高齢者で、無職人でなく、夢植人の心意気で意義ある日々を積み重ねて行きたいと念じている。

お願い

お墓の花ガラは現在、清掃業者に依頼して処分しておりますが、年間十六万円ほどかかります。

ゆくゆくは、花ガラはお持ち帰りということにしたいと思います。ご協力をお願いします。

墓地管理委員会

平成二十九年度年忌表

来年の年忌は次のとおりです。お早めにお申し込みください。

年忌	逝去年
一周忌	平成二十八年
三回忌	平成二十七年
七回忌	平成二十三年
十三回忌	平成十七年
十七回忌	平成十三年
二十三回忌	平成七年
二十七回忌	平成三年
三十三回忌	昭和六十年
三十七回忌	昭和五十六年
四十三回忌	昭和五十年
四十七回忌	昭和四十六年
五十回忌	昭和四十三年

各戸別の年忌はホームページでも見られます（過去帳閲覧）。

行事予定

○二月十一日　大般若会
正午から詠讃歌奉詠
一時から法要、参拝者には健康饅頭がもらえます。

○二月十五日　涅槃会
十時から法要と詠讃歌奉詠

○四月八日　灌仏会
十時から法要と詠讃歌奉詠
甘茶を頂いてください。

○八月十八日　お施餓鬼
棚経は八月十日くらいからです。詳しくは次号でご案内します。

★説法（修証義　第五章）☆

住職　春日井浩道

今回は、修証義第五章です。行持報恩という題が付いています。行持報恩とは、恩に報いるための行持（修行）という意味です。ここで恩というのは第二章の冒頭で出てきた「仏祖憐れみの余り広大の慈門をき置けり」（お釈迦様は、慈悲深くも悟りに至る、大きな道を残してくださった）ということを指しています。そして、この悟りへの道を示してもらったことにたいする恩返しこそ日々の修行であるということなのです。

なぜ、修行をするのかというと、それは、人間が肉体よりもはるかに強力な知能を持ち、それが暴走することによって人を苦しめるからです。様々な因縁によって、人となって、この世界に立っている自分たちは、お釈迦様の教えを聞くことができて、大変幸せではないか。それにより苦しみを開放できるのだから。

では、どうやってその教えを聞くか。世の中にある、いろんな教えの中から、正しい法を聞き取らなければなりません。「無上菩提を演説する」といっても、全部が正しいかどうかはわからないのです。その時に、語る人の、生まれや顔や挙動などを詮索するべきでないと言っています。結局は、外見にとらわれず、自分で判断しろと言っているようです。イスラムの教えの中にも「どんな愚者の言うことの中にも必ず真理はある。それを見つけ出すのが聖人だ」というようなことがあったと思いますが、おそらく同じことを言っているのでしょう。一旦それを獲得したならば、それこそ礼拝するような気持ちでこれを守り悩み疑う心を起こすべきではないと言っています。

そしてこの教えは、お釈迦様が開きそれに続く仏教者たちの努力があってこそ、今に伝わっているのです。こういうことを考えてみると、先人たちの努力に対して自ずと感謝しないわけには行きません。

その感謝とはどうすればいいのでしょうか。ほかでもない、これまでに述べてきたような、行持（修行）をしっかりやることが、この恩に報いるということなのです。なんだか、親から受けた恩は、子育てでこれに報いるということに似ていますが、やはりあり方としては真理なのでしょう。

そして時間だけはどんどん飛ぶように過ぎて行きます。人生は短く、過ぎ去った時間は二度と戻ってきません。また、百年の歳月を煩悩の赴くままに過ごしたとしても、その中の一日だけでも修行に振り向けるなら、それはそれで百年分の取り戻しをする**こと**ができるのです。だから、この思い立った一日はとても大切な一日になります。そして、思い立って修行しようとしている自分を、大切に思いなさい。

私たちが、行持することによった、お釈迦様が唱えられた道が実現するのです。ですから、たった一日の行持でもそれは、仏になるための出発点なのです。

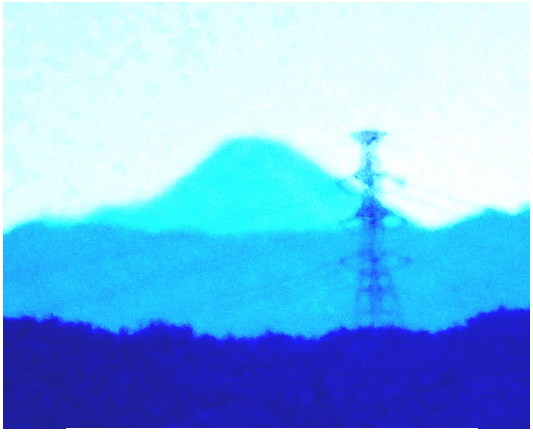
ここでいう仏とはお釈迦様のことです。お釈迦様といっても仏教の祖としてのお釈迦様ではなく、お釈迦様と同じ心で、悟りの境地に入れるというものです。これを即心是仏というのです。では、即心是仏というのは一体誰のことでしょうか。よくよく考えてみてください。まさしく、お釈迦様のご恩に報いることになるのです。

お経に書いてあるのは、こういう事のようです。修証義というお経は明治になってから、わかりやすいお経を日本語でということで、道元禅師の「正法眼蔵」という理論書から抜粋して作られたものです。「正法眼蔵」というのは、仏教哲学の最高峰だと言われておりますが、高すぎて凡人たる私にはほとんどわかりません。だいたい、永平寺の二代目で、道元様の一番弟子であった懐奘（えじょう）という人でもよく理解できていなかったようなのです。

そんなこと言っていても始まりません。次回は、冒頭の第一章をご紹介できればと思っています。

☆弥勒山から★

富士山は、春日井市の東一五〇キロメートルのところにあります。先日、春日井の最高峰、弥勒山からその富士山が見えました。ふだんは、霞んでいて白くしか見えないところにあの山影が見えたのです。



1000ミリの望遠レンズで

あまり皆さんは信用してくれなかったようですので。写真を掲載しておきます。ふだんは、ここに写っている鉄塔すらよく見えません。よほど気象条件と心がけが良かったようです。ちなみに内津峠の多治見側は富士見町といいます。

★お墓の管理のお願い☆

お墓の管理についてはみなさんにご協力をいただき感謝しております。最近は、お墓の面倒を見てもらえる人がなくて、返却される方もおられるようになってきました。これも時世なのでしょう。

そこでお願いなのですが、まだ石塔の建っていない方で、草ぼうぼうという方がおられますが、周りの方に大変に迷惑なので、是非お手入れをお願いします。シートのかけてある方も見えますが、万全ではありません。いちどお出かけいただいてどうなっているかご覧下さい。皆さんで気持ちよく使っていただくために、全員の方のご協力をお願い致します。また、お気づきの点は、慈眼寺または檀方総代までお知らせ下さい。

来年もよろしく
お願いします

檀方総代　伊藤辰男
〃　伊藤久幸
〃　伊藤秀文
〃　伊藤正廣
〃　大野和義
〃　大野悟
〃　木村廣孝
住職　春日井浩道

お仏膳の受付をしています

来年の月命日お仏膳の受付をしています。今まで通り、一年一膳あたり千五百円です。お供えのお菓子はお下がりとしてお持ち帰りください。

☆世相雑感★

アメリカの大統領に、世間の予想を裏切ってトランプ氏が当選してしまいました。安倍さんが真っ先に会談に駆けつけましたが、なんだかゴマすりにいったようで、国民の一人としては複雑な感じをいなめません。

アメリカが、経済的に負担が大きすぎるので、在日米軍にかかる金を全部負担せよというのなら、お帰りいただいてもいいのではないでしょうか。だいたい、自分の国の安全を他国の軍隊に頼るというのは、とても不自然ではないでしょうか。憲法九条だって、固有の自衛権まで否定するものではないというのが定説のようなので、それなら必要な範囲で十分な装備を持てばいいのではないでしょうか。アメリカから武器を買うようなことをせず、自前で開発すればいいではありませんか。自衛隊を増強すれば、若い人の雇用も確保されます。国の技術もあがります。それに、沖縄の基地問題の解決もうんと楽になります。日本を防衛するのですから、その基地は日本中に分散させるのが当然でしょう。

国民の協力なしで、本当に国を守ることなどできないと思います。それには、愛される国にすること、それは政治家の役目です。何も国歌を歌い国旗を立てることが愛国ではありません。そういう意味では三十パーセントが派遣社員だったり、「保育園落ちた、日本しね」という声が上がるような政治ではどうなんでしょう。政治家さんにも相当がんばってもらわないと。いざとなっても国は守れないよ。

もっとも、軍備を発動させる必要のないように、国を運営するのが政治家の役目なのですから、外交も命懸けでやってもらわなければいけません。大臣になって、得意顔で失言するバカ政治家なんて税金の無駄にしかならず、いらないような気がします。彼だって地元では名士様なのでしょうが。

いじめの問題がいつまでたってもなくなりません。福島の子供が避難先の横浜でいじめられました。「賠償金が入ったろう、よこせ」というのだそうです。いたたまれない気持ちです。こういうのも広い意味で原子力災害に含まれるのでしょうか。

★編集後記☆

暑い々と言っていたら、知らぬ間に木枯らしの季節になってしまいました。最近の記憶はなかなか定着しませんので、過ぎ去った時間は、本当に短く感じられます。過去の時間というのは、記憶の中にしか存在しないのです。記憶がなければ、一年でも百年でも同じ一瞬間なのです。写真に沢山のものが写っておれば、奥行が感じられるが、何も写っていなければただの紙のようなものです。

何はともあれ、人間も少しずつ入れ替わっていきます。今年は、母も逝きました。来年も良い年でありますように。

「慈眼寺たより」第二十一号
平成二十八年十二月十日発行
ホームページ
←←
http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenji/